

HOF 01-042

本田財団レポートNo.42  
「変化する日本社会」

大阪大学教授 山崎正和

## 講師略歴

山崎正和（やまさき まさかず）

昭和9年 京都に生まれる。

昭和31年 京都大学文学部を卒業。

昭和36年 京都大学大学院博士課程を修了。文学修士。

昭和51年 大阪大学文学部教授 現在に至る。

専 門 演劇学、劇作、評論。

著 書 「山崎正和著作集12巻」(中央公論社)  
をはじめ多くの著書がある。

このレポートは昭和58年11月29日、パレスホテルに  
おいて行われた第32回本田財団懇談会の講演の要旨を  
まとめたものです。

## はじめに

「変化する日本社会」という題でお話をするのですが、日本社会と言え、変化は付きものになっている言葉で、日本近代百年の歴史は正に変化の連続でした。ただし、私がここで問題にしたい現代の変化は、そうした近代化百年の流れの中で起こった、これまでの変化とはいささか異質のものではないか、と考えるのです。



この新しい変化が色々な形で見えてきたのは、1970年代以降のことであると言えましょう。つまり、産業化百年という大きな国家的行事が1960年代までに一段落をして、そこから先に新しい時代が開けてきたということです。ではどういう変化が起こったのか、すでに中央公論の本年8月号及び10月号の2回に渡って書いたことですが、これを要約することが私の本日の話の前半になります。

## 社会の多様化と個人の自立

'70年代から起こってきた変化は、ひと言でいえば日本の社会が多様化し、日本人が個人化して行く傾向の芽ばえとして概括できるのではないかと思います。まず消極的な条件として、この傾向を作り出した環境の変化を4つばかり挙げることができそうです。

第一は、国家のイメージが'70年代に急速に小さくなり始めたという事です。国家の実質的な機能は、'60年代までと比べて小さくなったとはいえませんが、しかし、国家の言わばセンセーショナルな影が小さくなったと見ることができます。

これは、日本が近代化に成功して、国際社会に於ける位置付けの上で大きな国家になったため、世界の舞台で目立つ動きをしにくくなったということによるものです。'60年代には、日本のGNPが劇的に伸びており、国家が大きくなっていくという現実を、国民は日々感じていたのです。オリンピックから万博まで、国家的レベルの事件に国民が関心の大半を向けていたことは、疑いのない事実です。振り返って見ますと、これは国家そのものが目的指向的に生きて来て、60年代にその頂点に達したことの反映であったという様に言えるかと思えます。

'70年代に入りますと、GNPはそれまでのように劇的に伸びるというわけにはいなくなり、国家的な事件や行事も少なくなりました。国家は面白い見世物ではなくなって、そのため'70年代から国民の関心はより身近な場所へと移り始めました。地域の時代が始まり、ライフ・サイクル、つまり個人の生涯という基軸が大きな問題になるという事が、'70年代の大きな変化の象徴であったと私は見ております。

二番目に、職場と家庭が個人にとって小さくなり始めたことが挙げられます。労働時間が短縮され、休日も増えましたし、さらに休日をとることは良い事だという思想が広がり始めました。'70年代後半になりますと、家庭の主婦が一日に持っている自由時間は7時間半に伸びました。個人の自由時間の増大は、我々の寿命が延びたことに

もより、一層拍車をかけられております。退職後、自分と向かい合って一人で生きなければならない時間が増えたわけです。

三番目に大きな現象は、不幸というものの性質が大幅に変わったことです。国民が連帯して受ける不幸の量が少なくなり、各人が個別に耐えなければならない不幸の分量が増えました。かつて国民病と言えれば結核でしたが、これは、国家的・全社会的レベルの対策によって撲滅されました。その代わりに象徴的に出てきた病気はガンを始めとする難病であります。ガンのような不幸は、単に死に直結しているから恐ろしいだけではなく、我々一人一人を孤独にして襲うから恐ろしいのです。

四番目に、社会一般の高令化が、社会を多元化し、多様化することがあります。均質的な青春とは違って、その人の社会的地位あるいはそれまでの閱歴が刻み込んだ、中高年の人生の相違というものは測りがたいものがあります。高令化ということは、単に高令者の数が増えたという事ではなくて、社会の雰囲気全体を大きく変えるという事です。'70年代に入りますと、大きなブームは後を絶ち、社会全体の趣味の個性化がめだって来ました。

## 消費動向の多様化

以上列挙しました4点の条件は、いずれも消極的な条件で、単に社会を個別化するだけの環境です。これらの条件により、積極的な意味での個人主義社会が成立するのか、あるいはたんなる社会の混乱が進むのかについては、より積極的な条件を探さなければなりません。

結論から申しますと、私自身はやわらかな組織の中でかなり自由に生きている個人中心の社会といった、楽観的な未来を見たいと思っております。

そのようになると思われる理由は、'60年代から'70年代にかけて豊かになった国民の消費動向の中に表われています。'60年代には豊かさが中途半端な状態にあり、文化生活の「三種の神器」といわれるような、社会的願望の象徴のような商品が固定されていました。ところが、'70年代に入るとそれは無くなり、それぞれの商品の種類が多様化し、国民全体の願望を一まとめにするような枠組みが緩んできました。

'60年代後半から'70年代にかけて、消費者の間に、自分は何か願望を持っていることはわかっている、それが何であるか自分ではわからない、と言う自覚が高まってきました。これが象徴的に現われたのが、生き甲斐論の流行であります。

本人自身でもわからないおもしろさ、楽しさを購買活動という行動を通して探求しているのが現在の社会です。消費者が、言わば目的指向の姿勢から、目的探求の姿勢に移りつつあるのが現代社会の一つの変化である、と私は見ております。

## 産業の情報化

消費者が目的探求の姿勢に移りますと、生産者側も変わらざるを得ないので。かつての生産の現場、勤め場所の構造が変わらざるを得なくなって来ます。効率的に、きわめて固い集団に分業の一単位として各人が帰属し、勤勉さと忠誠心を発揮すると

いう行動様式が占める部分が、全体として減りつつあることは厳然たる事実です。そうした目的追求型の行動は、コンピューターやロボットが生身の人間よりはるかに有効に機能する世界であるため、工場からは人が居なくなっています。これが産業の情報化と言われる現象ですが、この現象にも二段階のステップがあると私は考えています。第一段階は目的指向型の人間の行動をそのまま機械によって置き換える為の情報化です。ところが第二段階に入りますと、我々は情報そのものを産み出さなければならぬこととなります。生身の人間が情報を闇の中から探ってくるような部分が大きな位置を占め始めます。そうすると、今までの目的追求型、あるいは分業式の集団ではやっていけなくなり、その結果、忠誠心よりは自立心、単なる勤勉よりは創造の能力が必要になって来るでしょう。

## 自由と不安

次に非常におもしろい現象は、目的探求型の消費行動が国民の間に広がって来るのに応じて、消費者の間にも新しいタイプの組織が生まれつつあることです。要するに個人の社交の場所が広がってきたということです。それは、人々が生身でつきあう、顔を見合わせながら交流する場所です。単に暇ができたからというだけではなく、人間が新たな不安に見舞われたから交流する場所が必要になってきたのです。この不安とは、実は自由の裏返しにあるものです。つまり、自分自身で発見した自己が正しい自己であるか、ということに皆が不安になるわけです。皆が消費について不安になると、それぞれがお互いに確認しあい、自分の選択は正しかった、ということを経人に認めてもらいたくなります。今日の社交の場所はそういう意味での相互確認の場所であり、それぞれの自立心、創造力が評価される集団なのです。大衆化社会の最大の危機とは何であるかと言いますと、従来色々な社会学者が指摘しているところによれば、こうした小さな顔の見える集団が消滅していくことなのです。

昔ですと、家庭や職人のギルドという集団がその機能を果していましたが、情報化が進み、平等化が進んで来ると、そういった集団の枠組みとしての力が弱くなります。その結果、広い社会の均質的な情報が集団を介さず直接個人のまわりに流れ込んできますと、そこから混乱が起こってきます。私の見るところ、いわゆる「見せびらかしの為の消費」が起こるのは、個人が自分の消費を本当に見せるべき相手を持っていないからだ、と言えると思うのです。

## やわらかい組織

私は、職場が新たなやわらかい組織になりつつあり、趣味、文化の、あるいはスポーツのための集団が、それ自体の中で一つの顔の見えるコミュニティを形成しつつある、という二つの現象がうまく成長すれば、日本は世界の大衆社会の中でかなり良い安定した状況を保つことができるのではないかと、思います。そしてその中で出てくる個人主義というものも、無限なる欲望の肥大、無限なる自己主張、自己顕示というものから自動的に防がれた、やわらかい個人主義になり得るのではないかと、という様

に見ております。

## おわりに

現代の家庭の危機は決して動物的愛情の欠如、あるいは人間的な愛情の欠如によって起きているわけではないので、家庭が外部からの情報を処理するフィルター機能を失ったがゆえに生じつつあるわけです。ですから、情報に色々なフィルターをかけて、そこに多様性を作って行く仕掛ができると、家庭も安定してくると思います。

## 本田財団レポート

No.1 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭53.5	No.23 西ドイツから見た日本 電気通信大学教授 西尾幹二	昭56.6
No.2 異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって 東京大学教授 公文俊平	昭53.6	No.24 中国の現状と将来 東京外国語大学教授 中嶋嶺雄	昭56.9
No.3 生産の時代から交流の時代へ 東京大学教授 木村尚三郎	昭53.8	No.25 アメリカ人から見た日本及び日本式ビジネス オハイオ州立大学教授 ブラッドレイ・リチャードソン	昭56.10
No.4 語り言葉としての日本語 劇団四季主宰 浅利慶太	昭53.10	No.26 人々のニーズに効果的に応える技術 GE研究開発センターコンサルタント ハロルド チェスナット	昭57.1
No.5 コミュニケーション技術の未来 電気通信科学財団理事長 白根禮吉	昭54.3	No.27 ライフサイエンス ㈱三菱化成生命科学研究所人間自然研究部長 中村桂子	昭57.3
No.6 「ディスカバリーズ国際シンポジウム バリ1978」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭54.4	No.28 「錬金術 昔と今」 理化学研究所地球化学研究室 島 誠	昭57.4
No.7 科学は進歩するのか変化するのか 東京大学助教授 村上陽一郎	昭54.4	No.29 「産業用ロボットに対する意見」 東京工業大学教授 森 政弘	昭57.7
No.8 ヨーロッパから見た日本 NHK解説委員室主幹 山室英男	昭54.5	No.30 「腕に技能をもった人材育成」 労働省職業訓練局海外技術協力室長 木全ミツ	昭57.7
No.9 最近の国際政治における問題について 京都大学教授 高坂正堯	昭54.6	No.31 「日本の研究開発」 総合研究開発機構(NIRA)理事長 下河辺 淳	昭57.10
No.10 分散型システムについて 東京大学教授 石井威望	昭54.9	No.32 「自由経済下での技術者の役割」 ケンブリッジ大学名誉教授 ジョン F. コールズ	昭57.12
No.11 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ストックホルム1979」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭54.11	No.33 「日本人と西洋人」 東京大学文学部教授 高階秀爾	昭58.1
No.12 公共政策形成の問題点 埼玉大学教授 吉村* 融	昭55.1	No.34 「ディスカバリーズ国際シンポジウム コロンバスオハイオ1982」報告 電気通信大学教授 合田周平	昭58.2
No.13 医学と工学の対話 東京大学教授 渥美和彦	昭55.1	No.35 「エネルギーと環境」 横浜国立大学環境科学研究センター教授 田川博章	昭58.4
No.14 心の問題と工学 東京工業大学教授 寺野寿郎	昭55.2	No.36 「第3世代の建築」 ㈱菊竹清訓建築設計事務所主宰 菊竹清訓	昭58.7
No.15 最近の国際情勢から NHK解説委員室主幹 山室英男	昭55.4	No.37 「日本における技術教育の実態と計画」 東京工業大学名誉教授 齋藤進六	昭58.8
No.16 コミュニケーション技術とその技術の進歩 MIT教授 イシエル デ ソラ プール	昭55.5	No.38 「大規模時代の終りー産業社会の地殻変動」 専修大学経済学部教授 中村秀一郎	昭58.8
No.17 寿命 東京大学教授 古川俊之	昭55.5	No.39 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ロンドン1983」の報告 電気通信大学教授 合田周平	昭58.9
No.18 日本に対する肯定と否定 東京大学教授 辻村 明	昭55.7	No.40 日本人と木の文化 千葉大学名誉教授・千葉工業大学教授 小原二郎	昭58.10
No.19 自動車事故回避のノウハウ 成蹊大学教授 江守一郎	昭55.10	No.41 「人間と自然との新しい対話」 ブラッセル自由大学教授 イリヤ・ブリゴジン	昭59.2
No.20 '80年代ー国際経済の課題 日本短波放送専務取締役 小島章伸	昭55.11	No.42 「変化する日本社会」 大阪大学教授 山崎正和	昭59.3
No.21 技術と文化 I V A 事務総長 グナー・ハンベリユース	昭55.12		
No.22 明治におけるエコ・テクノロジー 山本書店主 山本七平	昭56.5		